

公開討論：希望学がめざすもの

仁田道夫（東京大学社会科学研究所 教授）

廣渡清吾（東京大学社会科学研究所 教授）

中村圭介（東京大学社会科学研究所 教授）

橘川武郎（東京大学社会科学研究所 教授）

中村尚史（司会：東京大学社会科学研究所 助教授）

中村尚…

現在、社会科学研究所の所属教員は四十数名おります。実はこの希望学プロジェクトを立ち上げるにあたり、内部の意見を吸い上げようということで、所員を対象にインタビューを行いました。

問いかけの主な内容は「希望」の社会科学的研究ということについて、どう思いますか？ ないしはどのようなアドヴァイスがありますか？」ということでした。この結果を集約して私が事前にご紹介し、それを踏まえて所員四名により少し議論をさせていただきます。

お話をさせていただきますのは、向かって左より廣渡、仁田、中村圭介、橘川です。時間の関係上、一人ずつの詳細な紹介は控えさせていただきます。それぞれの専門などにつきましては、お手元の資料に入っている写真付き「出演者一覧」をご覧くださいきたいと思います。

社会科学研究所（以下、社研）という所は、法学、政治学、経済学、社会学といった多方面の研究者が集っており、社会科学全般に渡ってカバリングしております。このような様々な専門の研究者が、「希望学」という従来にはなかったタイプの新しい研究にどのような反応を示すのか。そのことを我々コア・メンバーは気にもし、また興味深く知りたいたいと思つたわけです。回答はもちろん、積極的、消極的な意見がそれぞれ多様にございました。

そのなかでまず、積極的な意見を大きく四つのタイプに分けますと、一つは学問がどんどん個々に専門化していくなかで、その傾向に対して複数の学問分野に渡る学際性のある研究、ことに現実的な問題解決型の学問というのは絶対必要である。今回の希望学がその一端を担えばいいのではないかという意見。

二つめは、若者に希望がないと一般に考えられているという思い込みが、本当であるかどうかをきちんと調査を行い再検討することは絶対必要だという意見。

三つめは、さらには現状分析的な方法だけに止まらず、歴史的ないし哲学的な省察を土台にしながら希望を社会システムの中に取り込んでいく、という過程を私たちは社会から求められているのではないか、だから、その要望に応えるような学問を行うてはどうか、という意見。

四つめは、また希望を論じる場合、数量的な分析だけではなくて、インタビュー調査を含めたリアリティーのある議論を行って欲しいという意見。

これら四つの見解は複数のコメントをまとめたものですが、答えてくれた人たちはほぼ共通して、希望学を行うにあたっては個々人の「当事者性」が重要だといっています。つまりあまり無味乾燥にならないように気をつけろということですね。

ここまではまず積極的な意見なのですが、当然ながら消極的、懐疑的な意見もございます。その最も端的な意見は、まず「希望とはなにかと考えることなど贅沢病である」というコメントです。

二つめは、「社会科学という学問領域で希望について考えることに、どれほど意味があるのか？」という意見。そもそも希望という言葉は曖昧で、ある意味無責任なところがある。このような漠とした対象を、事実をもつて社会現象の客観的法則を求める社会科学で捉えることはできないのではないかと、ということですね。これは私自身、社会科学を研究している専門の学者と話していると、結構よく出てくる意見です。

最後はかなり根元的なコメントです。「希望のような心の問題は、きわめて個人的な領域に属する問題である。そのようなことに学問という名のもとで介入しようとすること自体に、「反対だ」。要するに心の問題に、実証を重んじる社会科学という学問が踏み込むべきではないという意見です。

このように私たちの小さな研究所の内部においても、「希望」というものを社会科学の領域で考えるということに関して、賛否両論があります。おそらく本当に、社会科学の研究者一人ひとり、希望という問題についての考え方は様々だといえるでしょう。そのことを前提にしたうえで、今日は希望学について所員の議論を披露することにしたしました。

実はこのプロジェクトの中心を担っているのは、玄田や私、また今日はいにくしんポジウムが重なりこちらに出席致しかねた宇野、とみんな四十歳以下の研究者です。四十歳以下の者が、「希望」などという捕らえどころのなさそうなことをテーマに、未知のなにか不可思議なことをやろうとしているわけです。(笑)。この新しい試みに対し、シニアである社研の諸先輩がどう考えているかということにも、内心気になると

ころがございます(笑)。そこで、この度は社研シニアからも、いろいろと忌憚のない意見を皆さまに披露させていただくことにいたしました。それでは、まず仁田からコメントを申し上げます。

仁田..

労使関係論を専門としております、仁田です。私の場合シニアはシニアでも、(笑)。今の中村尚史の話からいえば、他三名とはやや立場が違うところにいるようです。といますのも、私が社研の前所長を務めておりました頃、「なにか面白い新しいコンセプトの研究テーマはないですかねえ」などと玄田をそそのかしたところ、出てきたのがこの希望学なのです。(笑)。若手研究者に希望学を考えて貰った、つまり仕掛けた張本人ですから、このプロジェクトを強力にサポートせねばという立場にあるわけです。

しかしながら学問の大海に漕ぎ出す前から、希望学には困難な船出と思うところが二点ございます。まず、先に中村尚史が申し上げたインタビューの意見報告にもありましたが、「希望」を社会科学上のコンセプトとして位置づけることは実際のところ…：私も非常に難しいと思います。(笑)。

社会科学の分野はいろいろとありますが、通常の文献、ことに私が比較的よく眼にします経済学分野の文献では「希望」が概念として出てくるのが、滅多にありません。これまで何千何万という社会学者がいたにも関わらず、彼らがあまり希望という概念を使わないで研究してきたということは、必ずしも社会科学で容易に扱える概念ではないと考えた方がよいでしょう。

それからもう一つ。希望に関して一生懸命研究をしても、時代のパラダイム転換によつては消えていく学問であるかもしれないことです。先ほど玄田が「持つ希望と持てる希望」という話をいたしました。希望のことを社会科学で考えるという場合、なにを問題にしたらいいいのかという疑問がまず浮かびます。現時点ではそこがまだ確立しきっておらず、悩ましく議論がなされておりますが、問題を立てる場合、これまでの研究スタイルとしてはまず「希望を持ちやすい状況」を考えればよいというのが社会科学的・政策的なスタンスでした。たとえば「経済成長ということが非常に大切な要因であり、それをサポートできるような経済学の研究することが重要である」というのが伝統的な経済学者の考え方です。むろん、こうしたやり方を踏襲するのが重要だという方向性もあります。この点から見て、社研内のインタビュー記録を見ると、とても興味深いものがありました。

たとえば、社研にカーリンという若いアメリカ人の日本史研究者が在籍しています

が、彼がこんな指摘をしています。アメリカでは一九八〇年代末から九十年代初めにかけて、Generation X (ジェネレーション・エックス) と呼ばれ、六十年代半ば〜七十年代半ばに生まれて高度成長期に育った、希望が持てず、意欲や責任感に欠ける若者たちが問題になった。ことにアメリカ経済が落ち込んでいた頃のことです。ところが、九十年代になつて好景気になるとそういう議論はたちまち消えてしまった、というのが彼のコメントです。ですから私たちの「希望学」にもその可能性はなきにしもあらず、ということでしょう。以上が従来の伝統的、一般的な社会科学のなかから出てきうる二つの指摘です。

ただ、たとえ困難であつても私は今、希望の社会科学というテーマで研究することに意味がある、確かに取り組むべき課題であると思つています。現在希望がない、あるいは希望が持てない、希望が分からないと表現されていること、そこに社会の問題あるいは病理が現れていると感ずるからです。これは新しい社会問題の現れ方ではないでしょうか。そしてこれは、先ほど山田客員教授が指摘されたことと共通する問題関心かと思えます。六十年代であれば社会の問題はおそらく「不満」とか「欠乏」というキーワードとして現れていたことでしょう。それが八十年代、あるいは九十年代になりますと、キーワードは「不安」ということになつたのではないのでしょうか。玄田自身の最初の著書タイトルも『仕事のなかの曖昧な不安』でした。では今度は「不安」という形で表現されていた問題と、「希望がない」という状態とでは何がどう変わつてきているのかということ明らかにすることは社会科学の領域であり、社会学者が対応してゆくべき問題だと思えます。以上が、議論の出発点として考えていることです。

中村尚… 実は仁田は仕掛け人のひとりだったものですから、好意的なコメントでした。(笑)。
次は、廣渡からのコメントです。

廣渡… 廣渡でございます。最初に小森田所長が申し上げたように、これまで社研が取り組んできましたテーマは、たとえば「戦後改革」「民主主義とファシズム」「福祉国家」「現代日本社会」「二十世紀システム」、最近では「失われた十年——九十年代日本を捉え直す」などでした。

今回のテーマは希望というわけですが、これは今までのテーマと非常に大きく変わっています。どこが変わっているかはすぐお気づきかと思いますが、これまでは社会全体の仕組みやあり方を対象にしています。しかし希望というテーマはそうではありません。希望という言葉がすぐに夢や愛、幸福といったことを想起させるように、

一人ひとりの人間に寄り添った事柄として問題が出てきています。希望学というプロジェクトは、なによりも一人ひとりの人間に寄り添った優しい眼差しを出発点に持っているように思います。これは我々の世代にはない、新しい発想からの着眼点であり、希望学プロジェクトは社会全体のみならず一人ひとりの人間のありようにも目を向けようとしているわけです。

少し話が変わりますが、今年はハリウッド映画が生まれてちょうど百年になるそうです。先日テレビでこれまでの映画音楽のベスト一〇〇を紹介していました。ベストワンは、一九三九年の映画「オズの魔法使い」の主題歌で、主演のジュディ・ガーランドが歌った「オーバー・ザ・レインボー」、邦題が「虹の彼方に」という曲でした。虹の彼方の「Somewhere」、どこかに希望の国がある、という歌い出しの歌です。実はこの「Somewhere」という言葉は、人々が希望を語るときにしばしば結びつけて使われるように思います。

ご存じの方が少なくなってきたかと思いますが、私が高校生だった頃、一九六一年に日本で公開されました「ウエストサイド物語」というミュージカル映画がありまして、現在の「冬のソナタ」ばりのブームを巻き起こしました。これは二十世紀版ロミオとジュリエットの物語で、ニューヨークのウエストサイドを舞台に展開したマリアとトニーの悲恋物語です。ラストシーンで、ピストルで撃たれて絶命するトニーをマリアが抱きかかえながらふたりで歌うのが、やはり「Somewhere」、どこかに、というタイトルの歌です。ふたりで平和に静かに愛し合える場所がどこかに、と歌うわけです。

どちらの歌も、どこかにあるはずの理想郷を求めて歌われています。けれども、希望学プロジェクトが一人ひとりの希望に眼を向けるというとき、その希望は「どこかで、Somewhere」という文脈で問題にするのではないと思います。遠い夢のような理想の「どこかで」ではなく、現実の「ここで」を問題にするものだと思います。そして「ここで」を問題にすることは、「ここ」という場所と今、この時代がどういうものであるかを冷静に分析しなければならぬということでしょう。

東京大学教養学部で三年間客員教授として学生を教育した経験をお持ちの評論家、堺屋太一さんとお話して何ったことですが、今の学生の特徴として「彼らは未来というものがだんだん悪くなるものだと思う。少なくとも、良くなるものとは思っていない。そのことに深い印象を受けた」と指摘されました。本来、希望には未来が必要なはずで、学生たち一人ひとりの希望にもし目を向けようとするれば、何よ

りもまず彼らが生きている今ここで、この時代が希望にとって何か大きな問題を孕んでいるということを見なければならぬと思います。

希望学プロジェクトは一人ひとりの人間に寄り添う視線を基礎にして研究を行うという、私たちに社研にとってはおそらく初めての画期的な試みです。この研究は一人ひとりの希望のありように目を向けるところから出発し、それを大切にしながら、人々が生きるこの社会の仕組みを分析する方向に向かうものだと考えております。そしてこの分析は、希望というものを「どこかで」ではなく「ここ」で、「この時代」のものとするために、「こここの時代」を変えることに繋がるような研究でありたいと願っております。

私は法律学が専門ですので、社会の仕組みを法の仕組みとして分析することを仕事にしております。今は大きな歴史的変動の時期にあると思います。この変動する社会の未来を切り拓くような新しい法の仕組みを考えることも、この希望学プロジェクトの大きな課題の一つではないかと思っております。この課題を称して「希望の法原理」の探索と呼んではどうかと考えています。もつともまだ今のところ、希望の法原理を探索するという、この私の希望はSomewhereではないか、という気がしなくもありません。(笑)。

中村尚.. では、引き続き橘川です。

橘川..

希望は非常に当事者性が高い事柄だということで、五十は過ぎましたもののがキである自分が一番、当事者意識を持って臨んでいる私の専門は野球であります。(笑)。そして個人的にいつ希望を直近で感じたかという、二〇〇二年の三月三十日、東京ドームで阪神が巨人に三対一で勝った瞬間ということになります。なぜ希望だと思ったのかをよく考えてみますと、私が応援するチームは十七年間優勝していなかったの、それだけ絶望が深かったからであります。(爆笑)

希望というのは多分、深い絶望の中でこそ意味があるのではないかと思います。本日このシンポジウムにもこれだけ多くの方がおこし下さり、当プロジェクトがこのように注目されているのもそういうことなのではないでしょうか。

以前、昭和の時代は希望がもう少し安売りされていまして、高校野球の大会歌にも「希望」という言葉が出てきます。…ああ、歌いたくなってしまいます。(笑)。そのような歌が作られた当時は、正月の書き初めで「希望」と書くのと同じくらいみんな普遍的に、そしてわりと気軽に「希望」を語っていました。ことに未成年の若者であれば明るく希望を語るのはごく一般的なことでした。ところが今はものすごく、す

がるような気持ちで希望が語られている。社会的にはそこが非常に問題ではないかと感じます。

一方、「希望学」という学問にするにはどうするべきかを考えるとき、希望とは非常に個別的なことですので、どのようにメタなもの、汎用性のあるものにしてゆくか、私はそのところが難しいと思いました。現代に生きる一人ひとりが一番切実に考えている希望を、学問としてどう展望を見出していくのか？ そのためには What と How の追求が不可欠だと思うのです。「何を」目指せばいいのか。そしてそこに向けて「いかに」到達すればいいのか。この二つを詰めていかなければ希望学の研究は始まらないと思います。テーマへのアプローチの仕方は研究者の個々だとしても、What を見つけ、そこへ向けての How を考えていくという取り組み方に一種汎用性があります。ですからその先に、現実に通算する学問としての希望学があるのではないかと私は思います。

それから、希望という観点から歴史を振り返り、絶望から希望を見るときにとでも気になることがあります。それはインチキな希望、ウソの希望、ニセの希望、ということがこれまでの歴史にはたくさんあったということです。たとえばおそらく昔、フォルクスワーゲンとアウトバーンに、ドイツの失業者は希望を見出したに違いないでしょう。けれどもその先にいたのはヒットラーであつたわけでは

まず What と How を的確な形で定義すること。また「ウソの希望」が社会にまかり通ることをチェックしていくということも社会科学、そして希望学の一つの任務なのではないかと私は考えております。

中村尚…では続きまして、中村圭介です。

中村圭…私はスターバックスという今時のコーヒーショップに一回しか入ったことがなく、ここでは一体どういう仕組みでコーヒーが貰えるのか、未だに分かりません。(笑)。大学の近くにもスターバックスがありまして、見るとその看板になぜか「シャケン」と書いてあります。「おおつ、我が社研はそんなにも有名なのか」と思いました。よく見ますと、「シェークン (shaken)」でした。(笑)。そして、この希望学の事前インタビューでは、参考になりそうな文献をあげるといわれた時に「あしたのジョー」と、答えてしまいました。…確かに私、シニアかもしれませんが。(爆笑)

私はこれまでお話ししました三人とは違い、このプロジェクトの意義をちよつと引いた形でお話しようかと思ひます。玄田を始め、みんなが良かったですのでお分かりかと思ひますが、社研のスタッフに「希望学」の専門家などはひとりもおりません。玄田

は労働経済学。中村は……ちょっと脱線しますが中村というのが社研には三人おりまして、いつもはファーストネームで呼び合う仲です。司会の中村尚史は経営史。今日来られなかった宇野は政治哲学。先ほど社会調査の発表を行った佐藤香は計量歴史社会学。繰り返しますが、希望学などという学問の専門家はひとりもおりません。日本にもいないし、世界にも多分ひとりもないでしょう。全く新しい学問の分野をこれから創っていくというわけです。従って、その意味でこうした希望学のプロジェクトを立ち上げるというのは研究者にとって無謀なほどリスクなことなのです。

昨日、中村尚史と話をしていました。「(希望学を) やっていて、不安でしょう？」と聞くと「すごく、不安です」と即答されました。正直な言葉です。けれどもそうした不安を持ち、リスクだと分かっているが立ち上げた、というところにこのプロジェクトの大きな意義があると私は思います。そのことを皆さんに共有していただければ幸いです。

私たち研究者が何か研究を始めるといときは、だいたい二通りのパターンに当てはまります。個人的に「これをやりたい」と行うか、あるいは研究者仲間から「この研究が必要だ」といわれて行う。そして研究を進めるに当たっては、それぞれこれまでに開発された手法や方法、あるいは枠組みを使います。もちろん、そういう従来型の研究システムが社会のニーズと直接あるいは間接的に、強く関係していることもあります。しかしまた、ほとんど関係しないこともあります。実際のところ、社会的なニーズに関係するかどうかの研究の善し悪しを決めていたわけではなかったものから、そうなっていたわけです。

つまり、たとえば社会の方から「こういう課題が必要だよ」という訴えがあったとしても、私たち研究者はこの課題をそのままの形では研究のテーマにはしませんでした。自分たちが開発してきた言葉と枠組みに翻訳し、自分たちが研究しやすいように課題を組み換えて、学問を行います。希望学というプロジェクトの大きな意義であると共にリスクなところは、そうした私たちがこれまで取ってきた研究のスタイルをとっていない、ということなのです。

どういうことかといいますと、たとえばこのプロジェクトでは、リーダーである玄田の場合、社会のある部分、若者達が発する、もしかすると微かな声を拾い上げます。希望への焦燥感や挫折感、絶望など、そういうものを拾い上げて、それをそのままの形で研究しようというのです。研究者向けに翻訳することもなく。私はそこが、とても重要なことなのだと思うのです。かくして、アプローチする方法も手段も資格も分

からないまま、問題だけがポコッと私たちの目の前に放り出されました。それはこれまでの研究者のスタンスからすると、かなりの無茶です。「無茶」で語弊があるようなら、「特別なこと」なのです。

皆さんに、このプロジェクトの大きな意義を分かっていたいただきたいといいますのは、何よりもそこまでリスクを犯してでもやる価値がある、やるべきだという決断をしたということなのです。多分、満足な地図も方位磁石も持たずに、私たちはとにかく何かタックルしなければならぬ対象だけがあつて走り出しています。だからこのプロジェクトはとてもしスキーなのです。成功するか失敗するか、分からないと思います。けれども、そういう人たちがいる。出てきたということに皆さんが厳しく、しかし温かい目で見てくださればよいなあ、と願っております。

そしてある意味、このような無謀な研究者達が出てきたということが、この社会にとつて一つの希望であるかもしれない、と思います。ですから皆さまのバックアップがいただけましたら、幸いです。

中村尚… 私、妙にしんみりいたしました。今の話聞いて、なるほどそういうことかと思いましたが。たとえば私などは歴史、しかも明治時代の鉄道の研究などをしておりまして、今までほとんど社会の役に立っていません。と。(笑)。

実をいいますと、私のパートナーからも「あなたの研究は、何の役に立つの？」と今までずっといわれ続けてきたのです。それが今回、「こんなことをやるんだ」と希望学の説明をすると、「あ、初めて役に立ちそうじゃない」といわれました。それで、ああそうか、そういうことなのかと得心しました。…それで私はこのプロジェクトから引くに引けなくなつた、という経緯がございます。(笑)。

ですからこの研究の非常に難しいところは、私たちに問題意識はあるのですが、それをどのように具体化していくかということなのです。そのことで今、四名の見解を聞いただけでも非常に多様です。希望という言葉は、それを考える人によつてイメージが非常に拡散します。その状態からどこに向かつて収斂してゆくか。それが正直なところ私にも、つまり当事者本人たち、そしてその周囲の人々にもまだ見えていないという状況です。

結局こういう場合には、最終的には一人ひとりが自分の問題として研究を行つていくしかないかかもしれないと思うのですが、この際、先輩方に自分だったらどうするか、というところを具体的に聞いてみたいと思います。では、仁田から。

仁田…

まだどこから糸口を考えていいかのかよく分からない、ということですね。では、

事前インタビューで「今まであなたがしてきた研究テーマで具体的にどのようなテーマが希望学に関連し得るか」という質問を受けましたので、個人レベルの話になります。が、そのとき答えたテーマを申し上げます。

私が答えとしてあげたのは、いわゆる母子家庭についてです。私は母子世帯の調査を何年前に行いましたが、それまでは専門的にやっていなかったことですので非常に新鮮な体験でした。調査したデータの国際比較をしてみると、日本の母子世帯の就業率はいわゆる先進国の中では世界一高く、八五%を越えていました。次に高いのがスウェーデンですが八〇%もいかないくらい。ですから日本は非常に就業率が高い。それがなぜなのかというと、端的に言えば社会制度の問題です。児童扶養手当という制度があるということのインパクトが大きいうことが重要な要因なのです。その場合、母子家庭の母が就業するときに、彼女たちはどういう目当てでどういう希望を持って、仕事をしているのか？ という疑問が当初、私にはありました。この世帯の収入は非常に低く、年収はだいたい二〇〇万から三〇〇万円くらいの間の人が多いものですから気になったわけです。結局この場合、母親達を支えてきたのが希望だと思えます。就業する母親達にとって多分一番重要なことは、子どもを高校など学校に上げて教育をし、次世代には豊かな暮らし、普通の暮らしができるようになるということ。それが一番強い希望ではないかと思いました。

精神に希望があることが家庭を支え、そのことがそれなりに仕組みとして成り立ち、これまでの日本の社会では機能してきた。だからまた逆に、人々は母子家庭というマインオリティでありながらも、希望を持って生活することができたと思うのです。

ところが現在このシステムが、危うくなってきたと思われる節があります。特に高校進学者の就職が非常に難しくなってきたという事情が、重要な要因となっています。もしも就職難のために、これまで持っていた希望が全く無に帰してしまうと、日本の社会のなかに修復不可能な穴が開いてしまうことになると思うのです。

今申し上げた事例は、差し当たりこれまで自分がやってきたことから希望、あるいは希望がないという状況を考えた場合の、非常に小さな一つの窓にすぎません。けれどもこのようなことを議論し、書いてみて、それが他の皆さんにどのように受け止められるだろうか、と意識していくところが出発点だと私は考えています。

中村尚… 廣渡からは、先ほど「希望の法原理」という提案がありましたので、具体的な補足を。

廣渡… 一人ひとりの希望に目を向けて、そこに視線を据えて寄り添いながら社会科学をす

る場合、「希望とは何か」という直接に対象を設定するやり方はもちろん重要で、このことが今回のシンポジウムで要の問題となつています。私はそれと同時に、実は社会科学に希望はあるのか？ つまり学問に希望はあるのかという問題を立てることも重要ではないかと思っております。

先生方がなにか偉そうに「若者らが希望を持っていないのが、この社会の問題だ」といつているけれど、「そういうあなた方の希望はなに？」という問い。つまり社会科学という学問が今、希望を持つて研究をする状況にあるのかどうかというところに問題を据えてみては、と個人的には考えています。

これまでに法学が構築した一つの世界があります。その法学の世界が人々のいろんな行動との関係で大きな矛盾といえますか、不適合反応を起こしている。平たくいえば、まあ上手くいっていないという状況を生み出しているとして、ならばそれを変えようという方向性が何かということを探る。そのように法学、社会科学が向かうべき方向性を探ることが、実は一人ひとりの希望のありように結びつくのではないかと思うのです。

もう一つ、憲法からの切り口を付け加えます。私は最近、『希望としての憲法』という本をいただきました。この著者は私よりもさらに十歳ほど年上の、私が尊敬する法学者です。この本では憲法を希望として捉えるという見方をしており、私が今後どのような枠組みをもって法の世界を新しく構築するかを考えているのと、共通する想いがそこにあります。

憲法は一九四六年にできたものですが、日本国憲法には二一世紀を先取りした新しい原理的な考え方があると見ることができます。日本国憲法のなかに「希望を見る」といういい方が確かに成り立ち得るわけです。このこともよく考えてみたいと思っております。

中村尚.. そろそろ時間が迫って参りましたが、自分の問題として捉えたとき、どのように対処するかを、中村圭介より一言。

中村圭.. 私も自分の問題関心が先行するタイプなので、迷ったときはどうするかといいますと……走る。立ち止まって考えません。(笑)。考える時間を、自分から捨てます。つまり玄田は完全にそちらの方向に行っていると思えますが、(笑)。とにかく希望と名の付く、関心を惹くもの全てにアタックします。だからたぶん、皆さんのご協力がたくさん必要になると思います。そうして疾走し続けるうちに何か出てくる……はず、かも……しれません。(爆笑)。

中村尚… では、最後に橋川から一言。

橋川… 今、隣に座っている中村圭介から「力及ばずして倒れることは辞さないが、力尽くさずして退くことを拒否する」という、久しぶりの全共闘言葉を聞いたような気がして懐かしく、非常に感動しています。(笑)。しかし、全共闘と違って「希望」を構築的な学問として取り組もうというのですから、その姿勢にはそもそも無理があるような気がします。(笑)。

私が一つだけ思いますのは、絶望といいますか、抱えている問題を解決するための時間が短いと、希望というものは見えてこないということです。私はある大学で、夜間部の学生を教える機会がありますが、いわゆるニートになりそうな人もやはりいます。ですから折に触れてこんなことをいうことにしています。

三十代になると、自分は何のために生きているのかが分かると思う。社会、あるいは家庭のなかで自分がいなくて困るという部分が見えてくるからです。そしてそこが本当の勝負どき。就職活動というのは十年かけて、そこへ向けて自分をベスト・ポジションに持っていくための行動。そのルートを作ること自体が就職活動なのだ、という話をよくしているわけです。

ですから私自身、十年くらいの時間をセットして、そこに向けてどういう解決策を見つけていくのかということをいろんな問題でやってみたいですね。たとえば原子力の問題などでも、今は推進派も反対派も突き詰めれば同じようなことを考えていると私には思われてなりません。ただ、両者の間には今までに至る複雑な経緯があります。ですから自分としては、希望ということを念頭に置きつつ、十年後にはなんとかこうした問題を解決できるように努めたいと考えています。

中村尚… 皆さま、ご静聴ありがとうございました。